

財団法人

日韓文化交流基金

NEWS



第1回日韓文化交流基金賞

特集 学生交流の現在

日韓学生フォーラム／日韓学生会議／日韓環境ギャザリング

助成事業紹介

韓国メディアの『日本イメージ』改善の方向
第2回国際比較文学会東アジア会議

no.

11

1999

The Japan-Korea Cultural Foundation

はな 1995年(0号・油彩)

朴香淑 (パク ヒャンスク)

1968年 韓国ソウル生まれ
1997年 多摩美術大学油画専攻卒業
現在 多摩美術大学大学院在学中

日韓文化交流基金NEWS

目次

2	巻頭エッセイ キーボード上の日韓交流	秋月 望
表紙作品題名および表紙作家紹介		
3	第15回日韓文化交流基金韓国訪問団 第1回日韓文化交流基金賞	
4	特集 学生交流の現在 日韓学生フォーラム / 日韓学生会議 / 日韓環境ギャザリング / 学生交流の軌跡	
7	経済コラム 第四回(最終回) 韓国経済 - 成長の必勝方程式の崩壊	水野順子
8	助成事業紹介 韓国メディアの『日本イメージ』改善の方向 ~ 国際フォーラム「テレビの伝える外国イメージ」から ~ 第2回国際比較文学会東アジア会議 東アジアの文学 交流と交響(報告)	川竹和夫 芳賀 徹
	理事・評議員のコーナー 韓国米にまつわる若干の思い出	前田利一
10	日韓文化交流基金事業報告	
12	図書センター情報 / ホームページ情報	

韓国語の学習をはじめてしばらくして、タジャギ(打字機)なる単語と実物に出合った。七〇年代の半ばのことである。ハンタ(韓打)と呼ばれる韓国語タイプライターは、九〇年代にはいってもまだ活躍していた。母音と子音に分かれたハンゲルの構造、それに漢字の使用が極度に少ない韓国語の文体は、タイプの使用を容易にしていた。問題はパッチム(終声)部分にあったが、それもパッチム用の子音活字を別に設け、位置調整をうまく打てるようになっていた。異様に長い縦母音の縦棒が独特の雰囲気を持っていた。

当時、韓国に英文タイプを持ち込むと、活字をハンゲルに付け替えてハンタに改造してくれる業者がいた。ただ、持ち出しはなかなか難しかった。当時の朴政権は、反政府活動の情宣活動に利用されることをおそれハンタには特に神経を使っているといわれていた。八四年に韓国に渡ったとき、私は最新の日本語ワープロを持ち込んだ。確か三十二万円ほどしたと思う。漢字は単漢字変換のみ、ディスプレイには八文字しか表示できず、データはカセットに保存した。ハンタに比べるととてつもなく高価なものだったが、キーボードから漢字まじりの日本語が打てることに妙に感心したものだ。

その後、八七年に日本に帰国してはじめてコンピュータに触れ、パソコン通信にも手を染めた。当時、日本語OS(オペレーティングシステム)上ではハンゲルを処理することとはなかなか難しく、韓国語入力ソフトもあるにはあったが汎用性に問題があった。パソコン通信では、アルファベット表記でハンゲ

巻頭エッセイ キーボード上の 日韓交流

秋月 望
明治学院大学国際学部教授

ル表示させるプログラムなども作られた。ディスプレイ上で如何にして日韓の言語の壁を越えるかという試みだったといえる。今やインターネットの時代。パソコンはマルチリンガルが可能になり、日本語OS上でも韓国語や中国語を読み書きするのは特に難しいことではなくなつた。ハンゲルのホームページの

閲覧はマウスを何回かクリックするだけでできてしまう。韓国から来る電子メールも当たり前のようハンゲルで表示される。おまけに日韓・韓日の翻訳ソフトまであって、それなりに使える。シンセマン チネヨ(お世話になってばかりです)を、身分だけムカデだ」などと、時々とんでもない誤訳もするが、タジャギからパソコンへ。二十数年前とは比べようがないほど、金銭的にも技術的にも容易に日韓の言語の壁を越えることのできる環境ができてきている。さらにそれぞれのパソコンをインターネットで結ぶことが可能になった。すでに、いくつかの試みがあるようだが、こうした環境を、日韓の様々なレベルでの交流、さらには教育や研究交流にいかん活用していくのが、これからの大きな課題である。

あきづきのぞみ



一九四九年福岡生まれ。九州大学文学部朝鮮史学科卒業。九州大学大学院文学研究科博士課程修了(文学修士)。在韓国日本大使館専門調査員(八四、八七年)。八七年九月明治学院大学国際学部専任講師。九六年四月から現職。九八年から明治学院大学情報センター部長。その間九一、九三年在中国日本大使館で専門調査員。編著書に「韓国百科」。

第15回日韓文化交流基金韓国訪問団

八月二十九日より九月一日まで、当基金訪問団が訪韓いたしました。今回の訪問団は、韓国との交流に深い関心を抱かれています日本の文化人の方々も多数参加され、韓国における日韓の文化交流の現状の視察や、韓国の人々との交流を行いました。

第15回日韓文化交流基金韓国訪問団参加者

- 団長 藤村正哉 基金会長
- 副団長 熊谷直博 基金理事長
- 顧問 戸塚進也 基金常任理事、元衆議院議員
- 顧問 衛藤清吉 東洋英和文学院院长
- 顧問 竹内宏 (財)静岡総合研究機構理事長
- 顧問 三浦隆 基金理事、桐陰学園横浜大学教授
- 顧問 達澤義朗 埼玉県議会議員
- 団員 大内延介 (社)日本将棋連盟専務理事
- 団員 上坂冬子 作家

在ソウル特派員との懇談会



芸術の殿堂視察

第15回日韓文化交流基金韓国訪問団日程	
期日	日程
8 / 29 (日)	午後 ソウル到着、結団式 小田野展丈臨時代理大使による「韓国の現状」プリ・フィング 在ソウルジャパン・クラブ幹事との夕食会
8 / 30 (月)	午前 金鍾泌國務總理表敬訪問 午後 在ソウル特派員との昼食懇談会 金順珪文化観光部次官表敬訪問 韓日文化交流基金会長主催晩餐会
8 / 31 (火)	午前 芸術の殿堂視察 午後 小田野展丈臨時代理大使主催午餐会(ハイアットホテル) 韓国学界、文化人との懇談会 藤村団長主催晩餐会及び第1回基金賞授与式
9 / 1 (水)	午後 帰国(成田)

- 団員 神山征二郎 映画監督
- 団員 小山敬次郎 基金理事、さくら総合研究所顧問
- 団員 高城美輝 オフィス・スタス創立メンバー、元松竹歌劇団団員
- 団員 竹下勲三 基金理事、(株)神戸製鋼所常任顧問
- 団員 千澤忠彦 (社)日本電機工業会常務理事
- 団員 角田房子 作家
- 団員 外門一直 電気事業連合会副会長
- 団員 榑崎正博 東京電力(株)取締役
- 団員 前田一生 関電産業(株)社長
- 団員 矢森智 音楽指揮者
- 団員 智 日本合同音楽振興会理事 (財)関西電気保安協会顧問 (団員以下五十音順、敬称略)

第1回日韓文化交流基金賞

当基金では、韓国において日韓文化交流に貢献された方に対して、その功績を讃えるために、「日韓文化交流基金賞」を創設しました。厳正な審査の結果、次の三名の方が第一回の受賞者に決定しました。八月三十一日にロッテホテル(ソウル)において藤村正哉団長主催晩餐会の席上で授与式が行われ、受賞者には正賞の盾と、副賞として賞金三百万ウォンと、日本招待旅行の目録が伝達されました。

受賞者紹介



金洙容(キム スヨン)
映画監督
受賞理由
木浦で孤児のための養護施設経営に一生を捧げた日本人女性である田内千鶴子さん(韓国名「尹鶴子」)の生涯を描いた日韓合作映画「愛の黙示録」を監督し、また韓国での公開に向けて努力された功績が高く評価されました。



田澄新(チョン ヨンソン)
高麗大学校名誉教授
受賞理由
『源氏物語』を韓国語に初めて元訳出版したことに



任華公(イム ファゴン)
華芸家
受賞理由
一九四五年以前に京城(当時)在住の日本の生け花の師匠に師事され、現在は韓国華芸の第一人者として、多くの華芸家や会員の研修に日夜励まれています。韓国に在留する日本人に、韓国華芸を指導し、長年にわたって日韓の華道交流に尽力されています。

- 経歴
一九一九年生 京畿道安城出身
一九五〇年 ソウル師範大学校法科卒業
大学教授、国際映画祭審査員を歴任。現在芸術院会員(映画)K.J.Kフィルム代表
映像物等級委員会委員長
主要作品
『血脈』『山火事』『霧』『土地』『笑い声』
『愛の黙示録』など
- 経歴
一九一四年生
京畿公立高等女学校卒業
一九五八年 梨花女子大学校家政科学大学講師(現)
一九六〇年より、華公会主催華芸展を毎年開催し、模範展示会を多数開催
著書
『華藝』『華藝百人輯』(全四巻、主婦の友社・日本)

【特集】 学 生 交 流 の 現 在



対島芳洲会の方をお招きしたシンポジウム



通信使を接遇した寺院を見学して

近年、日本と韓国の若い世代間の交流が様様な形で盛んに行われています。その中でも、大学生が自主的に集まり、自分たちの手で企画・運営を行っている団体では、学生ならではの行動力と柔軟な発想を生かして、独自の交流プログラムを作っています。当基金は設立以来学生団体の活動を積極的に支援しています。

今年の夏のプログラムを中心に彼らの活動とその軌跡をご紹介します。

日韓学生フォーラム

友好の歴史の舞台をともに歩いて

日米学生会議経験者の有志が韓国国際学生協会に働きかけて実現した討論会が発端となり、一九八六年に発足した日韓学生フォーラムは、英語を共用語とした討論とフィールドワークを中心としたプログラムを行っています。

今年の参加メンバーは日韓それぞれ十八名

の大学生で、日本国側からは東京から十四名、名古屋から四名のメンバーが参加しました。毎年全国各地で新しいメンバーの募集を行っています。

今年、第十五回日韓学生フォーラムは、「21世紀、新たな日韓関係とは何か 善隣外交をめざして」をテーマに、八月月にわたる事前研修を経て、八月六日に西国メンバーの対馬入りから始まりました。対馬を開催地に選んだのは、二つの国を結ぶ重要な役割を果たしてきた日韓関係の軌跡をたどり、そして二十一世紀に向けての「善隣外交」を考えるとという趣旨に最もふさわしい場所だと考えたためです。

対馬での三日間の滞在中、地元の対馬芳洲会の協力を得て、シンポジウムや分科会、スポーツ大会、フィールドワークなどの密度の濃いプログラムを行いました。フィールドワークでは、対馬で開催された「アリアン祭り」の朝鮮通信使を再現した「朝鮮行列」を見学し、また通信使を接遇した長寿院・万松院を見学して、日本と朝鮮半島の交流の歴史の場に立つとともに、その精神が今も対馬に息づいていることを実感しました。

福岡での滞在と、ホームステイを経て、十三日から十七日までは東京に場所を移して、分科会による討論と、日韓それぞれの企画による、「コリアナイト」「ジャパンナイト」を催し、民族舞踊を披露するなどして、手づくりで両国の文化紹介を行いました。

プログラムの最初の滞在地を都会から離れた対馬にしたことで、運営上は確かに多くの困難がありました。実際に雨森芳洲ら先人たちが「誠信の交わり」を結んだ場所を、自らの目で確認することで、このフォーラムのテーマは参加したメンバーにとって、より身近なものとして感じられるようになったのではないだろうか。

日韓学生会議

徹底的な討論から生まれる相互理解と友情

日韓学生会議は、日韓の学生有志の発案により、日韓関係に関心を持つ日本の大学生と、東京の韓国人留学生が準備委員会を結成し、一九八六年八月に第一回会議を開催しました。今年の韓国でのプログラムで十四回目を数えます。今回は、「出発するための出発 20世紀韓日西国の壁を越えて」という大会スロークーガンのもと、プログラムを実施しました。

今年の参加メンバーは、日韓それぞれ十五名の大学生で、韓国側にはさらに過去のプログラムの経験者などからなる六名のスタッフが事務局の任務を果たしています。

日本側代表団が最初の滞在地の原州（江原道）入りした八月二日は、ソウル周辺は漢江が氾濫するほどの豪雨に見舞われ、この先どうなることかと思いやられたそうです。今年の分科会のテーマは、「日本と韓国の昔話の相違点」「日韓の女性問題」「日韓の若者の意識の違い」「日本と韓国の映画」「外国語教育の問題点と解決策」「日韓の死の文化の違い」

の六つでした。日韓学生会議の特徴としては、討論に集中するために、学生のボランティア通訳を通してディスカッションを行っていました。原州滞在中は、多い日は一日六〜八時間もの分科会形式による討論を行いました。

八月九日からは場所をソウルに移し、分科会の内容を全体で討議するシンポジウム・プログラムの入り込みました。各分科の報告が行われる中で、最も関心を集め、盛り上がったのが、「若者の意識の違い」でした。儒教の影響が強い韓国と、相対的にオープンな日本との違いが浮き彫りになり、非常に興味深い報告になりました。



分科会議。真剣な表情

ディスカッションに忙しい日程の間にも、スポーツ大会や文化紹介などのプログラムで楽しみました。プログラムも終わりに近づいた八月十五日に、全メンバーでソウルの北にある仁旺山に登りました。ここについた岩山に苦勞して登り、頂上からソウルの街を一望したときの気持ちは最高だったそうです。



運営をリードしてきた中心的メンバー

日韓環境ギャザリング「環境」をキーワードに、新しい結びつきをつくる

日韓環境ギャザリングは、「きゃんばすえころじー実行委員会」という日本全国約百の大学・高校の環境サークルが所属する団体の活動から生まれました。まず自分にとって身近な大学の環境から見直していくことから始まった、「きゃんばすえころじー」は、学園祭でのゴミの削減、講演会の実施、リサイクル、大学環境調査などで地道に成果を挙げてきました。そうした活動の延長として、今年から新たに韓国の学生との交流を模索することになりました。

韓国語を勉強しているメンバーが中心になって、韓国のカウンターパートとなる団体をさがすところから活動が始まりました。三月頃から日本側のメンバーが訪韓し、韓国の環境団体や下部の学生団体とのネットワークづくりに努めました。大邱の環境保護団体で



フィールドワーク。干潟で東京湾に残された自然を観察

ある、「グリーン・ネットワーク」に参加する学生を日本に招聘することとなりました。

プログラムは八月十五日から十九日までの五日間でした。韓国から参加したのは事務局スタッフも含めて十一名、日本側は全国から二十六名の学生が東京・代々木オリンピック青少年センターに集まりました。

プログラムは、日韓それぞれの団体の活動報告から始まり、環境に関する諸問題をテーマにした分科会、四つのグループに分かれてフィールドワークを行いました。フィールドワークの見学先は、環境庁、武蔵工業大学横浜キャンパス（日本初のISO14001取得キャンパス）、谷津干潟・三番瀬、ネイチャーゲーム（自然に親しむための教育的プログラム）体験でした。

日本と韓国の学生が最も大きな違いを感じたのは、自然環境と精神的に一体化し、保護していくこととする韓国側の理想的で情熱にあふれたアプローチと、現代の都市生活の



ネイチャーゲーム体験

中でいかに環境負荷を減らしていくかという実際問題に直面している日本側とのシステマティックなアプローチの差だったそうです。武蔵工大を見学する前、韓国の学生がイメージしていたのは、「つつそつとした緑におおわれた、豊かな自然環境に囲まれたキャンパス」だったのに対し、実際には住宅地の真ん中に近代的な建物が立ち並び、建築物の構造のひとつひとつに省エネルギーのための緻密な設計がどこに隠れているか、超現代的なキャンパスだったことに、認識の違いが最も象徴的に現れていたそうです。

韓国から大きな太鼓と衣装を持ってきて、プログラムの合間に披露してくれたサムルノリも、非常に印象深い「コマ」になりました。韓国の学生の感受性の豊かさに触れることによって、日本の学生も、優れた方法論の裏に豊かな心をもって環境問題に取り組むべきではないか、という感想を寄せるなど、お互いにとって得るものがたくさんありました。

学生交流の軌跡

日韓間で自主的な学生交流団体が結成されはじめたのは八〇年代半ば頃からです。それ以前には、政府間で大学生を中心とした青少年の訪問団が相互に往来していました。民間レベルでの青少年交流はまだ数少ない段階でした。当時の日本における韓国イメージは、「デモ」や「反日」に画一化された暗いものだった一方で、韓国の学生も日本に対して良い感情を抱くことは難しく、民間レベルで日韓の青少年が共同事業を行うという雰囲気にはなっていませんでした。また、西国とも「国際交流」の概念が、まだ欧米中心のものであり、アジア諸国との交流が視野に入りにくかった時期でもありました。



プログラム中にメンバーが誕生日を迎えた
(日韓学生会議)



サムルノリの披露。日本の学生は興味津々
(日韓環境ギャザリング)

なレベルで新しい結びつきが模索されました。一九八六年に日韓学生会議と日韓学生フォーラムがほぼ同時に発足しましたが、両国の学生の間で、与えられる情報だけでなく、同じ世代の若者と直接会い、意見を交わすことによつて、相手に対するイメージや疑問を直接、確かめたいという欲求が非常に高まっていたといえるでしょう。また、一九八八年のソウルオリンピック開催や経済発展は、日本における韓国に対する関心を飛躍的に増大させるきっかけとなりました。韓国社会が経済的に豊かになり、八〇年代後半に海外渡航に関する規制の緩和が進んだことも民間レベルでの交流プログラムの実行がより容易になった一因です。現在、初期の学生交流メンバーは既に社会の中で活躍する世代になっています。こうした活動から、バランスがとれ、客観的かつ前向きに日韓関係を自分の言葉で語るこ

とができる。同世代の中ではトップレベルの「知韓派」「知日派」が生まれてきたといつても過言ではないでしょう。学生交流の経験を生かして、NGO・NPOの活動に入つていったOB・OGたちも少なくありません。民間の国際交流・日韓交流の力強い担い手のゆりかごとになったという意味でも、学生交流団体の活動は高く評価できるでしょう。運営の難しさ

学生交流の活動は、運営面で数多くの困難を抱えています。プログラムは年に一度、もしくは半年に一度のペースで行われることが多いようですが、学生メンバーは入れ替わりが激しく、またインターカレッジ形式の場合、常設の事務局や事務所をもてないことが多いため、前回の経験やノウハウを次の世代に伝えていくのが難しい部分もあります。

また、無視できないのが、資金の問題です。多くの学生団体は、当基金も含めて民間の助成財団からの助成金や、寄付金によつて活動資金を賄っていますが、参加するメンバーがある程度の個人負担を余儀なくされています。その場合、日本に比べて民間の助成制度が少ない韓国側の財務状況がなかなか改善されず、結果的に日本側のメンバーの個人負担が増大してしまつたという問題も指摘されています。

「国際交流」や「親善」といつく一見華やかで楽しいイメージがありますが、実際には一種の経営管理能力を發揮してプログラムを

計画・実施しなければならず、国の違う相手と時には厳しい交渉しなければなりません。お互いの仕事のやり方に対する考え方の違いを実感するなど、ディスカッションや見学だけではなく、普段の活動や準備段階の実務こそが、異文化を背景に持つもの同士が、時には摩擦を経験しながら合意を形成したり、相互理解の段階を進んでいくための重要なプロセスであるといえるかもしれません。

新たな流れ

近年では、必ずしも日韓交流・国際交流が通常のメインの活動ではなくても、共通の問題意識からスタートした日韓の様々な学生グループの間に接点ができ、プログラムの内容も多様化するという傾向が指摘できます。例えば、ボランティア活動を一緒に行うなどの、「協働型」や、前に述べた日韓環境ギャザリングのような、「イシュー型」の交流プログラムがそれに当たります。また、両国の大学生の間に電子メールやホームページの利用が一般化したことにより、通信のためのコストが低下し、日常的な交流や情報交換がより容易になっています。交流の内容が個別具体化し、「日韓交流専門」の団体が主に交流を行っていた時代から、いろいろな団体が興味・関心に応じて日韓交流に関わることができるよう時代へと移行し、結果的に日韓の学生交流の間口と可能性はさらに広がっているのではないのでしょうか。

韓国経済 成長の必勝方程式の崩壊

水野順子

日本貿易振興会アジア経済研究所

従来の韓国企業の成長パターンは、韓国が語るころによれば、日本型であったという。その中身は、売れ筋製品を見極め、すばやく日本から技術を導入し、銀行からの借入金で巨額な設備投資を行い、その製品を作るための設備や素材・部品を日本から輸入し、大量生産して輸出する、というものである。韓国が述べるには、日本はアメリカから技術を買って、銀行からの借入金で設備投資を行い、それで輸出しているのだから、韓国企業の成長パターンは日本型であったという。しかし、IMF以降の韓国経済はアメリカ型に変化する、と多くの韓国人が考えている。

ところで、韓国の従来の経済成長パターンが、本当に日本型であったかという点、答えは否である。韓国が製造している製品が、日本と競合する製品が多いということ、それを生産する企業のあり方で日本と同じであるということにはならない。これまでも韓国は、韓国型の経済成長をしてきたのである。今後もアメリカ型や日本型にはならないであろう。ちなみに戦後の日本経済がアメリカから製品技術を導入し、製品を生産するための設備や素材・部品をアメリカから輸入し、アメリカに大幅な赤字を作りながらアメリカ製品と競合して輸出し、経済成長してきたわけではない。日本の製品技術は、同じ自動車でも小型車であり、アメリカの大型車中心の技術ではないし、当然設備は自前の生産設備である。IMF体制が、韓国経済の成長の型をアメリカ的にする、という認識は、アメリカの決算制度等を導入するところからきている誤解であろう。そ

のことは別としても、IMFの条件が韓国の従来の財閥を中心とした経済構造を壊すものであることは確かである。企業が外国から巨額な借入金を導入できなければ、外国から製品技術を導入し、巨額な設備投資ができず、大量生産による輸出という成長パターンは崩壊する。収益率の高い企業であれば、これまでのような資金調達が可能であるかもしれないが、巨額な赤字をグループの一部の企業に集約し、財務構造の良い企業がシウウインドー的な役割を果たし、外国銀行から資金調達をすることは不可能になるであろう。財閥という特定の企業が経済の大部分を占める経済構造は変化せざるをえない。韓国は新たな成長の方程式を模索する必要がある。おそらくその作業には時間がかかり、五年任期の大統領が方向を示してできるようなやさしい問題ではない。各企業が自社の強みを検証し、それを伸ばす方向で成長の方程式を組み立てることになろう。その強みは、各社それぞれに異なるものであり、またそうでなければ危機に強い経済構造にはならない。



みずの じゅんこ

一九五二年生まれ、京都大学経済学部卒業、京都大学経済学博士。七七年アジア経済研究所入所。専門は機械産業。九一年から九三年に韓国ソウル大学経済研究所客員研究員。現在日本貿易振興会アジア経済研究所地域研究第一部主任研究員。著書に「韓国の自動車産業」、韓国機械産業の企業間分業構造と技術移転…電子・工作機械産業の事例、日系進出企業と現地企業との企業間分業構造と技術移転…タイの自動車産業を事例として（いずれもアジア経済研究所発行）。

韓国の企業経営が、外見は日本とよく似ているものの、よくよく注意してみると日本と違っていろいろ話を書いてきた。

前回、韓国の一九九七年の経済危機は、銀行からの巨額な借入金による設備投資の失敗の結果であることを述べた。IMFの処方箋が企業グループ（俗称財閥）の構造改革にまで踏み込んでいるのはそのことを意味し、政府も金融の構造改革と並列し企業構造改革を課題としている理由がそこにある。

韓国メディアの

『日本イメージ』改善の方向

「国際フォーラム」テレビの伝える外国イメージ」から

ITFP JAPAN代表

川竹和夫

去る七月三日、東京の千代田放送会

館で、ITFP JAPAN(国際テレビ番組フロー研究日本プロジェクト)が主催して標題の国際フォーラムを開催した。このフォーラムは、世界十一カ国と日本のメディア(主としてテレビ)が、それぞれ相手国をどう伝えているか、について、国際調査を進めてきた結果を報告し、それをもとに討論したもので、アメリカ・ドイツ・中国・韓国からは共同研究者を招聘した。

このうち韓国は、先頃の「日本大衆文化開放 政策の波紋などを背景に、特に重点対象として、三人の研究者を招いて、最近の韓国メディアの動向を

中心に報告を聞いた。

まず、韓国外国語大学の金政起副総長は、「KBSテレビの報道」を例にひいて、日韓問題の報道は、従来、日本批判のトーンのものがほとんどだったが、最近では『日韓漁業協定締結』のニュースに見られるように、客観的報道のものが多くなった。その他、日本の福祉行政や庶民のエネルギー節約意識などを、見習うべきモデルとして紹介するなど、過去にはなかった傾向がある」と紹介した。また、日本の『天皇』を『日王』と呼んでいたのを、『天皇』と呼ぶようになったのも報道態度の変化の一例である」と報告した。

次に、漢陽大学校言論大学院の朴永祥院長は、韓国テレビのドキュメンタリー番組では、日本の植民地時代を回顧するものが続いている一方で、『日本人のポジティブな面をクローズアップさせた番組(韓国人と日本人・四部作)』も放送されるようになった」と紹介し、韓国のメディアは、日本を民族主義的視野から見る立場から、現実的パートナーと見る視座に移りつつある」と強調した。また、日本の大衆文化開放に

関する報道では、「日本文化が青少年に及ぼす悪影響」を懸念する一方で、雑誌・歌謡曲・アニメなどが韓国社会に浸透している現実を直視する必要があるとする見解も多い」との指摘があった。

その他、ドラマやバラエティ番組に日本の盗作と思われるものが多いことも紹介された。

最後の総括討論で、ソウル大学校の李相福名誉教授が、韓国でも日本でも、マスメディアが大衆に迎合して、従来の相手国イメージに関する偏見を変えようという傾向があるが、最近のメディア報道の変化をきっかけとして、メディア同士の交流を深め、相互理解を進めるべきだ」と締めくくった。

このフォーラム、特に韓国関係のセッションには定員をはるかに超過する二百五十人が集まり、新聞にも大きく報道されるなど、大きな反響があった。

ITFP JAPANでは、今回のフォーラムへの関心の強さに意を強くして、今後も日韓交流に資する研究を続けることにしている。

かわたけ かずお

ITFP-JAPAN(国際テレビ番組フロー研究日本プロジェクト)代表。東京大学文学部卒業。NHK放送記者、報道局編集部副部長、放送総局主管、放送世論調査所所長を歴任。その後、東京女子大学教授、駒沢女子大学教授として「国際コミュニケーション論」を担当。現在、成蹊大学講師。著書に『データブック日本人』『ニッポンのイメージ』『テレビのなかの外国イメージ』『異文化のなかの日本』『メディアの伝える外国イメージ』など。



ITFP-JAPAN(国際テレビ番組フロー研究日本プロジェクト)代表。東京大学文学部卒業。NHK放送記者、報道局編集部副部長、放送総局主管、放送世論調査所所長を歴任。その後、東京女子大学教授、駒沢女子大学教授として「国際コミュニケーション論」を担当。現在、成蹊大学講師。著書に『データブック日本人』『ニッポンのイメージ』『テレビのなかの外国イメージ』『異文化のなかの日本』『メディアの伝える外国イメージ』など。

理事・評議員のコーナー

韓国米にまつわる若干の思い出

(財)日韓文化交流基金 特別顧問

前田利一



一九八四年の末、三年数カ月わたる大使の任を終えての帰国を控え、青瓦台の全斗煥大統領御夫妻から各国大使離任の際の恒例である昼食に招かれ、妻とともに参上した席でのことです。

雑談の場に移って大統領から突然

「貴大使は見たところ極めて健康そうだが、その秘訣は何か」

とお尋ねを受けました。虚をつかれて私は拙い韓国語をもって、

「自分はこの土地に生まれ、青年期までこちらで育ち、外交官としての韓国在勤も三回にわたって大変長い期間となりましたが、その間ずっと韓国のお米、韓国の御飯をいただけてきました。この韓国米が私の健康保持に一番良かったように思われます。それ以外に特別なことは何もやっておりません」

とお答えしたところ、大統領は破顔大笑されつつ、「米とは安いものだ。貴大使は帰国後も、いつでも韓国を再訪されたい。その際には必ず韓国米を御馳走して差し上げるから」

とジョークを述べられたのを、今でもはっきり覚えて



全体会議 一番左が川竹和夫代表、左から2人目が李相福ソウル大学校名誉教授

第2回国際比較文学会東アジア会議

東アジアの文学 交流と交響（報告）

京都造形芸術大学学長 芳賀 徹

日本比較文学会（JCLA: Japan Comparative Literature Association）は戦後まもなく昭和二十三年（一九四八）に創立され、現在では会員千名をこえる国内唯一の比較文学比較文化研究の学会である。ほとんど国連なみに大きい国際比較文学会（ICLA）のなかでも、アメリカやフランスにさえまさる重要な一翼をなして、とくに一九八〇年代後半からは活発な国際活動をつづけている。

同じ頃から東アジアの隣国、中国お

- 一、人と山水（座長、大阪女子大 中西進。各母国語発表）
 1. 朴熙秉（ソウル大）「韓国の山水記」
 2. 王曉平（天津師範大）「中国山水詩に読む文化史」
 3. 林水福（台湾輔仁大）「文化としての風景 余光中の旅行記」
 4. 金原理（熊本大）「文学における山水表現 古代日本漢詩文に即して」
- 二、東洋の覚醒（座長、帝塚山学院大 上垣外憲一。日本語）
 1. 崔元植（仁荷大）「西洋と日本、二重の衝撃の狭間で 丹齋申采浩」
 2. 劉建輝（北京大）「上海発 西洋の衝撃 宣教師による漢文雑誌」
 3. 平川祐弘（福岡女学院大）「アジアの目覚め 刺戟伝播の諸問題」
- 三、批評のかたち（座長、ソウル大 李相沃。英語）
 1. 金禹昌（高麗大）「Literary Criticism in Asia, Under the sign of Performance」
 2. 桑葉雲（北京大）「Forms of Chinese Literary Criticism」
 3. Eugene Eoyang（香港、嶺南学院大）「The Ethics and Aesthetics of Chinese Literature」
 4. 大嶋仁（福岡大）「Tendencies in Modern Japanese Literary Criticism」

よび韓国の比較文学会とは格別に親密な交流を重ねてきたが、五年前にはICLAの一方針として、日韓中（台湾を含む）三国の協同作業による『東アジア比較文学史』全三巻（予定）の編集を推進することが決定された。一九九七年初夏には、すでに韓国ソウルでのプロジェクト実施のための第一回国際会議が開かれ、それをつけて、本年六月十八日、福岡市で催されたのが「第一回国際比較文学会東アジア会議 東アジアの文学・交流と交響」である。

この会議は『東アジア比較文学史』の三部構成、すなわち古代中世編、近世近代編、文学理論編のそれぞれから、まずもつとも興味を呼びそつな章を選んで、それを主題とする二セッションに分けて進められた。各セッションでは韓国、中国から招いた学者たちと日本の研究者が組み合わされて発表した。簡便にするため、上にそのプログラムを載せておく。

いずれも発表者の得意の分野での報告で、約七十名の聴衆との応酬もはなはだ活発だった。ただ、第一、第三セッションの発表では、問題の性質上、二国間に共通の理解が成り立ちやすく

つたが、近世近代を扱う二セッションではそうはいかない。西洋の衝撃への対応の強弱の差、近代化の遅速の差そして革命、戦争、植民地と独立の問題がすべてからんでくる東アジア近代史は、比較文学比較文化研究の上では他分野におけるよりもいっそう歴然たる研究態度と認識の差異、ときに対立をもたらし、だが、その齟齬を自覚し、相互に理解し、調停し、克服してゆく過程にこそ、『東アジア比較文学史』執筆の一つの重要な意義はある。その意義については参加者全員に暗黙の、しかし確かな了解が生じたことも、本会議の成果の一つであった。

なおこの会議に収まりきらず、翌六月十九日から二日間の日本比較文学会福岡大会の方で報告した海外からの参加者、とくに韓国の林谷澤氏（仁何大）、李心寿氏（世三平大）、金榮樓氏（ソウル大）らの発表も、抜群の輝きで日本人参加者に強い感銘を与えた。そのことを追記し、日韓文化交流基金による助成が十分にその額を上回る効果をあげたことを、ここに御礼とともに御報告する。



はが とおる

1931年生まれ。東京大学教養学科卒業。東京大学大学院比較文学比較文化専攻博士課程修了。東京大学教授、国際日本文化研究センター教授、大正大学教授を経て99年より現職。文学博士。著書に『平賀源内』、『サントリー-学芸賞』、『絵画の領分』、『大佛次郎賞』、『文化の往還』、『詩の国 詩人の国』など多数。日韓文化交流基金評議員、日韓文化交流会議委員。

（この文章は、芳賀徹氏の講演内容に基づき、編集されたものである。一部、芳賀氏の発言を引用している。）

思うに、私が咄嗟にこのような御返事を申し上げたのには、同年の夏ソウルで行われた韓国米返還に関する交渉、かつて韓国が米の凶作に見舞われた時、日本から経済協力として韓国に貸し付けていた米を、計画をくり上げて、この際大至急できるだけ大量に返してもらったのを通じ、韓国側より示された恩義を有り難く思う気持ちが心に強く残っていたからのことでした。

ことは当時日本政府保管米の消毒に使われた臭素だつたが人体に対する許容量を超えて残留しており、消費者の食糧には供し得ない事実が明らかになり、米の需給計画に大きな狂いが生ずるのを防ぐため、政府として政治的、行政的に最も傷が軽くて済む最良の策として至りついたので、ひたすら韓国側の好意にすがつてその奮発に期待しようとした、いわばまことに虫がよいともいえるのがこの方策でした。

早速ソウルで始まった実務者交渉がすぐに行きつまりに陥った状況に直面して、私は韓国要路の関係者に必死で陳情に廻つたのを、幸いにも先方が快く受け入れ、七月半ばに至って韓国側は十五万トンという量の米を現物でくり上げ返還することにふみ切ってくれ、この米は時を移さず本邦の各港々に運ばれてきました。

私はこの交渉を通じて、韓国要路の方々、日本側からの唐突な、勝手過ぎるともいえる要請にもかかわらず、ひとしく、この度は韓国として昔受けた恩に何とか報いようと思つている、との道義心を交渉の大方針とし、大局的見地に立つた日韓関係観を持っておられることを覚られました。大統領に対し私をして、韓国米につき前記のような発言を行わしめたのは、この交渉で受けた感銘がどこか強く影響しているのではないかと、ひそかに考えております。

● 日韓文化交流会議

基金は、七月十八日に発足した「日韓文化交流会議」の事務局を担当することになりました。この会議は、両国の有識者が、文化、芸術交流について幅広く協議することを目的に、一九九九年三月の小淵恵三首相と金大中大統領による日韓首脳会談で設置が決まったものです。七月十四日に両国の座長・副座長・事務局による準備会合が東京で開催されました。また、九月二十二日にはソウルで第一回の会議が開催されました（詳細は第12号でお知らせいたします）。

● 日韓共同研究フォーラム

日本と韓国の人文・社会科学分野の研究者による共同研究プロジェクトである「日韓共同研究フォーラム」は、今年度より三力年の第二次研究チームに入りました。今研究チームでは、歴史1（前近代史）、歴史2（近現代史）、日韓関係、国際政治、政治、経済、社会学の七つのチームが編成されました。七月

チームリーダー会議（7月1日）



日本側メンバー（委員は五十音順）		韓国側メンバー（委員は가나다順）	
座長	三浦朱門 作家	座長	池明観 翰林大日本学研究所長
副座長	平山郁夫 画家	副座長	金容雲 漢陽大名誉教授
副座長	小此木政夫 慶應義塾大教授	副座長	崔相龍 高麗大教授
委員	饗庭孝典 杏林大客員教授	委員	姜萬吉 高麗大名誉教授
委員	千宗室 裏千家家元	委員	高銀 詩人
委員	田中優子 法政大教授	委員	柳鈞 韓国放送公社解説主幹
委員	芳賀徹 京造形芸術大長	委員	朴性垠 梨花女子大大学院教授
委員	広中平祐 山口大学長	委員	李成干 作曲家
委員	松尾修吾 財団法人音楽産業文化振興財団理事長	委員	李清俊 順川大客員教授
委員	黛まどか 俳人	委員	林英雄 劇団「サヌリム」代表
委員	水谷幸正 浄土宗総合研究所長	委員	張明秀 韓国日報社長
事務局長	熊谷直博 日韓文化交流基金理事長	事務局長	徐淵昊 高麗大教授

● 学術文化研究者交流・招聘事業—研究者フェローシップ

・訪日フェロー（7 - 9月までの受入）

日韓学術文化青少年交流事業

研究者	研究テーマ	受入機関	研究期間
金貞恵	伝統家族の変貌にみられる小説的形象と意味 — 島崎藤村と廉想渉の三部作の比較を中心に —	清泉女子大学文学部	1999/8/1-2000/7/31
李相禹	韓日安保協力体制の研究	慶應義塾大学地域研究センター	1999/8/15-1999/10/14
李昌益	日韓現代語彙の研究	東海大学日本文学科	1999/8/15-2000/8/14
金浩燮	日本の北朝鮮に対する政策決定要因： 国内的要因を中心として	慶應義塾大法学部	1999/9/1-2000/8/31
李妍淑	古代韓国と日本における詩歌の比較研究	大阪女子大学	1999/9/1-2000/8/31

日韓平和友好交流計画

研究者	研究テーマ	受入機関	研究期間
金聳振	室町時代における日韓両国文人の詩文唱和	京都大学大学院文学研究科	1999/9/1-2000/8/31
崔京玉	日本憲政史の研究	京都大学大学院法学研究科	1999/9/1-2000/8/31
吉仁成	植民地期における日本・朝鮮・台湾の 生活水準の変化に関する比較研究	大阪大学大学院経済学研究科	1999/9/1-2000/2/28

● 訪日団

	計	男	女	期間
韓国交流協力関係者訪日団	20	17	3	8/3-8/12
中学校教員訪日研修団	20	12	8	9/7-9/16
中学校・高校教員訪日研修団	20	15	5	9/7-9/16
韓国大学生訪日団（1）	20	9	11	9/28-10/7
韓国大学生訪日団（2）	20	6	14	9/28-10/7

● 訪韓団

	計	男	女	期間
神奈川県教員訪韓団	19	12	7	9/28-10/7

一日に日韓チームリーダー会議（於日韓文化交流基金 会議室）を開催し、三力年の方針について報告が行われました。九月十八日には総会が開催され、日韓両国のメンバーの多くが参加し、各チームの研究計画について検討しました（於慶應義塾大学三田キャンパス）。

第二次研究ターム チームリーダー

チーム名	日本側チームリーダー	韓国側チームリーダー
歴史1	渡辺 浩（東京大）	朴忠錫（梨花女大）
歴史2	宮嶋 博史（東京大）	金容徳（ソウル大）
日韓関係	小此木 政夫（慶大）	張達重（ソウル大）
国際政治	大畠 英樹（早大）	文正仁（延世大）
政治	小林 良彰（慶大）	李甲允（西江大）
経済	野副 伸一（亜細亜大）	朴英哲（高麗大）
社会学	服部 民夫（同志社大）	金文朝（高麗大）

● 事業報告書

この期間に、以下の事業の報告書が完成しました。
日本交流協力関係者訪韓研修団報告書（五月二十五日 六月一日実施）

韓国理解促進セミナー（北海道・東北地域）報告書
（二月二十三日 二十四日実施）



● 日韓中高生交流事業

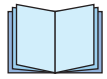
昨年十月の日韓首脳会談の合意に基づき、日韓の若い世代の交流をさらに活発化していくため、中高生の交流事業への支援が開始されました。この計画に基づき、以下の事業に対して支援を行いました。

韓国ボイススカウト 各三十五名
四団体（八月三日 八月十八日）
韓国ガールスカウト 三十五名
一団体（七月二十二日 八月四日）
韓国中高生研修旅行 この期間には二百八名の中高生引率者含む）が、京都・奈良・大阪で日本研修旅行を行いました。
第一陣（高校生） 百四名（八月十六日 八月二十日）
第二陣（中学生、高校生） 百四名（八月二十日 八月二十四日）

● 『韓国史蹟散歩』



基金では、韓国の史蹟に関する資料として、故森田芳夫氏著『韓国史蹟散歩』を作成しました。これは、七〇年代半ばから八〇年代にかけて『アジア公論』に掲載された森田氏の原稿を再編集したもので、一般的な観光コースとは異なる韓国の史蹟の由来や美を紹介しています。



図書センター情報

逐次刊行物の受け入れ状況 - 紀要

誌名	発行	刊行頻度	所蔵号数	欠号
アジア・アフリカ文化研究所 研究年報	東洋大学アジア・アフリカ文化研究所	年刊	31号(96年)~	
中央大学 アジア史研究	白東史学会	年刊	1号(77年3月)~	
アジアフォーラム	大阪経済法科大学アジア研究所	不定期	1号(88年12月)~	5号
杏林大学外国語学部紀要	杏林大学外国語学部	年刊	10号(98年)~	
杏林大学研究年報	杏林大学付属国際交流研究所	年刊	2号(99年)~	
言語文化論究	九州大学言語文化部	年刊	6号(95年)~	7号(96年)
年報 朝鮮學	九州大学朝鮮学研究会	年刊	1号(90年12月)~	
朝鮮学報	朝鮮学会	季刊	1集(51年5月)~	
朝鮮文化研究	東京大学文学部朝鮮文化研究室	年刊	1号(94年)~	2~3号(95~6年)
東北アジア研究	東北大学東北アジア研究センター	年刊	1号(96年)~	
比較社会文化	九州大学大学院比較社会文化研究科	年刊	1号(95年)~	
東アジア研究	大阪経済法科大学アジア研究所	不定期	1号(90年3月)~	
東アジア地域研究	東アジア地域研究学会	年刊	2号(95年)~	
文献ジャーナル	富士短期大学出版部	隔月刊	第35巻第2冊(95年7月)~	第35巻第3冊(95年9月)~ 第37巻第2冊(97年7月)
北東アジア文化研究	鳥取女子短期大学	不定期	1号(95年3月)	4号

基金ホームページURL

<http://www.asc-net.or.jp/jkcf>

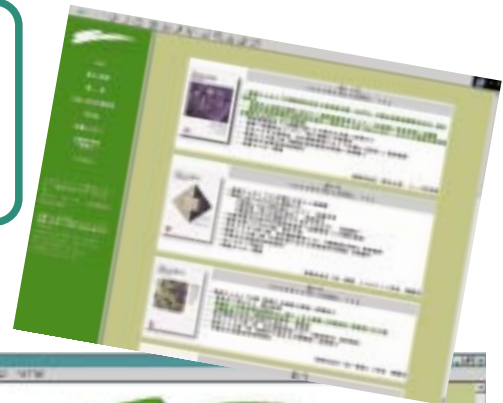
ホームページ E-mail:jkcf@asc-net.or.jp

図書センター E-mail:lib1jkcf@oak.ocn.ne.jp

ホームページリニューアル

7月に基金ではホームページを全面的にリニューアルし、「最新情報」から基金の動きをタイムリーにお知らせできるようにいたしました。一部公募事業のガイドラインや申請書式もサイトからダウンロードできるようにいたしました。図書センターの和書及び洋書の所蔵データも随時追加更新が行われています。

また、今号から広報誌の全ての内容をホームページにPDF形式で掲載することとなりました。10号までの内容は、目次と一部の内容をご覧になれるようになっています。



発行 (財)日韓文化交流基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコービル3F
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326
発行日 1999年9月30日